

2021 年度「共同研究事業」活動報告書

実践研究課題:身近な生活課題に対応した小学校家庭科の授業づくり

和歌山大学教育学部 山本 奈美・今村 律子・村田 順子

和歌山大学教育学部附属小学校 静川 郁子

令和 3 年度近畿小学校家庭科研究会和歌山大会実行委員会

(代表:橋本市立西部小学校 校長 丸井 利恵)

1.はじめに

小学校家庭科の研究グループでは、附属小学校及び各地域の研究会と連携して、研究会ごとのテーマで授業研究に取り組んでいる。昨年度に引き続き今年度も附属小学校における授業研究と、伊都地方技術・家庭科研究会が中心となって組織している令和 3 年度近畿小学校家庭科研究会和歌山大会実行委員会との取組について報告する。

2. 活動の概要

(1)附属小学校

題材名:手縫いにトライ!

実践クラス:5B および 5C

授業日:5 月～6 月の火または木曜日

今年度の連携は、家庭科を研究教科とする静川教諭が受け持つ 6 年生ではなく、5 年生を担当する中野特任教諭との連携であった。基本的な手縫いの技能については、中野特任教諭が前もって動画を作成し、授業時に児童はそれらを iPad によって確認しながら技能習得できるよう工夫された授業であった。実習時間によっては、参観ではなくチーム・ティーチングの指導・支援体制をとらせてもらうことができた。

【目的】

家庭科学習において初めて針と糸を扱う 5 年生が、手縫いの技能を習得する際に、どのような内容の声かけをすることが基本的技能の習得に役立つかを観察し、実際に児童へ声かけを行うことにより、実習のつまずき部分を把握し、より良い授業づくりの一助とすることを目的とした。さらに、本年度の 5 年生には、前年度(4 年生)の図工学習の際に、『ドット絵と毛糸刺しゅう』を教材として採り入れ、毛糸と毛糸用とじ針を利用して手芸用ネットに作品を完成させる実践授業に関わらせてもらった(当時担当:武友特任教諭)。4 年生で用いた針と糸は、家庭科で扱うものとは種類が異なるが、針と糸を扱うという 4 年生での経験が家庭科学習に役立つかどうかという点についても確認することを目的とした。

【結果および考察】

過去に 6 年生児童の実習授業を参観した際、小学校卒業間際においても玉結びを習得できていない児童が目についた。手で作る玉結びでは、手指の巧緻性が未発達であるため、「糸を撚る」という作業が苦手であることが原因であると理解していた。今年度の児童の様子を見る限りでは、糸を撚ることが苦手ということではなく、糸を撚る際に、人差し指のどのあたりに糸を巻き付けるかという点が、そのあとの「撚る」行為のしやすさにつながっていると感じた。すなわち、糸を指先に近い部分で巻き付けていると、玉結びを上手く作

れていたが、人差し指第 1 関節に近い部分に糸を巻き付けている児童では、糸を擦る作業に上手くつながらなかった。この児童には、動画を見ながら、糸を巻き付ける位置を指導することによって、上手く「擦る」作業をすることができた。結果として、クラス全員が指で作る玉結びを習得することができた。

針に糸を通すだけで、授業時間が終わって住まう児童がいると以前聞いたことがあったが、現在は針の穴が大きく改善されたものが裁縫用具入れに入っているため、糸通しはスムーズであった。しかし、糸通しが苦手な児童は、糸通し(スレダー)の使い方を知らない場合が多かった。スレダーの使い方も指導する必要があった。

その他、玉どめの位置が布のすぐ近くに作ることが難しい場合に針を固定する位置を明確に指導すること、名前の縫い取り時に、縫い目の大きさをどのように工夫するかの声かけをすることなどにより、児童の技能が向上することが確認できた。

針の安全な取り扱いについては、適切な指導がされており、針を置くときは針さしに刺す児童の様子が観察できた。前年度の図工で用いた毛糸用と針の針の先端のとがり方が毛糸用とは異なるので扱いは違うという認識であった。また、たびたび針を床に落とす児童がいたが、周囲に座っている複数の児童が当該児童に安全面で声かけする様子もあった。

基本的に、児童は素直であるので、教師の声かけを聞き入れて楽しく授業に参加しているため、ポイントを絞った追加説明が児童の技能習得に有用であると思った。

(2) 令和 3 年度近畿小学校家庭科研究会和歌山大会実行委員会

伊都地方技術・家庭科研究会では、令和 3 年度近畿小学校家庭科研究会和歌山大会の公開授業に向けて、研究会メンバーと大学教員が連携して授業づくりに取り組んできた。地域の小学校で 4 つの内容を分担し、昨年度からの継続として指導案の検討、教材開発、研究授業及び研究協議を重ねてきた。予定していた大会は冊子発表となったが、10 月から 11 月にかけて各担当校で公開授業を行い、その成果を共有することができた。以下に、授業の概要を記す。

① A 家族・家庭生活

題材名:恋野大好き!ぼく・わたしにできることを考えよう!~地いきの人々とのつながりを大切に~

実践校:橋本市立恋野小学校

授業日:10月26日(火)

小学校学習指導要領における「地域の人々との関わり」に対応した内容である。これまでの学校独自の取組である「三世代交流の集い」を家庭科での学習と連動させ、地域で生活する自分とは異なる世代の人々との交流を体験することを通して、生活における他者との関わり、地域で暮らす一員としての自己の存在を意識させることをねらいとして構想された題材である。コロナ禍においては、地域の人々との交流そのものが難しくなっている。恋野小学校でも 7 月に予定していた三世代交流の集いは中止となったが、授業者は別の機会を設けて本題材につなげ、交流の機会を振り返ったインタビュー動画によって「よりよい関わり方」を児童に考えさせていた。現行の学習指導要領では、各教科の見方・考え方を働かせることが求められている。家庭科の場合は「生活における見方・考え方」がキーワードとなるが、自分とは異なる世代の人々との交流の機会を家庭科における生活の視点で振り返り、交流に参加してくれた地域の人々の思いを知ること、その地域に暮らす生活者の一人として児童に芽生えた「共生」の意識を感じることができるといった授業であった。児童は次の交流の機会への意欲を高めており、学校として長く続けてきた三世代交流の集い

の価値を家庭科の授業で子どもたちが捉え直す機会となっていたと思われる。このような授業が可能となるのは、そのベースとして学校独自の地域との交流の取組が長く続いてきたことによるところが大きく、各学校の事情によって全く同じ授業を実践することは難しい。しかし、研究会として協働して本授業実践を検討する過程で、家庭科として「地域の人々との関わり」をどのようにとらえ、子どもたちにつけたい力として何を目指すべきなのか、題材への理解を深めることができたと思う。今後、各学校の地域性を生かした授業実践が広がることを期待したい。

② B 衣食住の生活(衣生活)

題材名:はじめてのミシンでソーイング! すてきな袋を作ろう

実践校:橋本市立高野口小学校

授業日:11月11日(木)

現行の学習指導要領において被服製作実習の題材に袋物が指定されたことを受け、実習題材の開発に取り組んだ。ちょうど1人1台のタブレットが学校に導入された時期であったことから、タブレットを入れるための袋づくりを設定できたことは、児童の生活にとって製作に必然性のある実習題材となり、時宜を得たものとなった。本時は製作の過程で袋づくりに必要な布の大きさを考える段階であり、タブレットの大きさに対してゆとりと縫いしろを見込んだ布の大きさを見積もるために、方眼紙を用いて試し作りをグループで行った。どのような教材が適切なのか、どのような順序で試し作りの作業を進めていくか、授業者がどのような表現で内容を説明するのか等について、他校での実践も踏まえて授業を練ることができた。多くの児童が初めてミシンを使った袋物の製作に取り組む中で、製作の手順を理解させるだけでも指導の難しさがあるが、加えて本時では製作に必要な布の大きさにはゆとりと縫いしろが含まれることへの理解を目指している。難しい題材であるだけに製作への見通しを持たせ、児童の思考を助けるために布の代わりに紙という具体物を用いて試行錯誤することが有効であり、多くの児童が「失敗」したからこそその気づきが得られた授業となっていた。児童それぞれに多様な思考が見られ、多くの学校で実践を重ねることによりさらに授業研究を深めたい題材である。

③ B 衣食住の生活(食生活)

題材名:工夫しよう!ベスト献立~学校農園の野菜を使って~

実践校:橋本市立境原小学校

授業日:11月2日(火)

栄養のバランスを考えた1食分の献立を立てた後、学級でベスト献立を決め、その献立をおいしく調理するための調理計画を作成する授業である。おいしく食べるために献立を構成するそれぞれの料理の「できあがりの時間を合わせる」ことを課題として設定し、そのためにはどんな工夫が必要かを考えさせている。タブレットを使って調理計画を作成することで計画の修正が容易となり、デジタル教材のよさを生かした授業展開となっていた。調理に慣れていない児童は作業の見通しを持ちにくく計画を立てること自体に困難があるが、クラスでの発表を受けて自分の計画を修正するなど、調理計画に対する思考を深める様子が見られた。調理計画に1つの正解はなく、さまざまな工夫が考えられる。この後、実際に調理をすることにより、事前に立てた計画の問題に気づき、さらに修正を加えていく、その積み重ねによってさらにより調理計画の工夫が可能となる。それがまさに、児童の学びに向かう力ということになるだろう。

学校での調理実習は、「児童生徒同士が近距離で活動する」ことから特に感染リスクの高い活動と位置付けられ、実施に強い制限を受けた。境原小学校では、手指消毒、マスクの着用はもちろんのこと、| テーブル | 児童の | 人調理で感染予防を徹底しているとお聞きした。そのためには、調理実習の準備や後片付けにこれまで以上の授業者の労力が必要となる。調理計画はその後に調理を実践してこそのもので、コロナ禍における調理実習指導の実際についても情報共有できたことは有益であった。

④ C 消費生活・環境

題材名：生活を支えるお金と物

実践校：かつらぎ町立妙寺小学校

授業日：10月27日(水)

身近な物の選び方、買い方を理解し、購入のために必要な情報の収集・整理を行いながら、よりよい買い物の工夫について考える題材である。身近な物として本題材では自主学習に使うためのノートが4種類設定され、購入に必要な情報をチラシ、使用者の口コミ、店員さんへの質問など、複数の手段によって入手する授業展開が設計されていた。新たな情報が追加されるたびに児童はどのノートを購入すべきか自己の判断の見直しを迫られ、よりよい買い物の工夫に向かわせる授業展開になっていた。この題材でも複数の学校で指導案や教材を共有し、時間内に授業を収めるために内容を精選したり、ワークシートを修正したり、板書計画を見直したりと、実践を重ねるたびに授業が改善されていくことが実感できた。また、何を教材として選択し、どのような情報を提示するかといった設定は、子どもの生活実態への理解がなくては成り立たない。日々、子どもと接する授業者の感性から適切な教材が導き出されており、子どもの反応に回答する授業時のパフォーマンスを含め、参観した大学教員の側としても学ぶところが大きかった。

3.おわりに

今年度も昨年度に続き、新型コロナウイルス感染症の流行に日常の教育活動のみならず、教員研修、授業研究の面でも大きな影響を受けたが、幸いにも本共同研究事業の枠組みの中で多くの授業を参観させていただく機会を得た。学校を訪問し、直接授業を参観させていただく中で、このような大変な状況の中でも子どもたちの学びを成立させるための先生方の努力を感じ、頭が下がる思いであった。急遽、前倒して始まったタブレットの導入にも対応され、資料の提示や意見の交流などの場面で、そのよさを生かした活用がみられた。そのような学校現場の様子を大学の授業を通じて学生にも伝えることで、共同研究事業の成果を還元することができたのではないかと思う。

伊都地方技術・家庭科研究会として和歌山大会に向けた授業研究は一段落するが、今回のようにいくつかの学校から家庭科に携わる教員が集まり、お互いの実践を交流し高め合う場として、地域の研究会活動を充実させていくことがよりよい授業づくりにつながることを強く感じた。附属小学校では残念ながら今年度の研究大会において家庭科の授業が設定されなかったことから、5.6年生のみの家庭科は継続して授業研究に取り組む体制の維持に苦勞している。本共同研究事業がその継続のための役割の一端を担うことができるよう、今後も学校現場と協働した授業研究を発展させていきたい。